

「なっとくのケア」を探索する 手立てが得られる

評者◎村嶋幸代

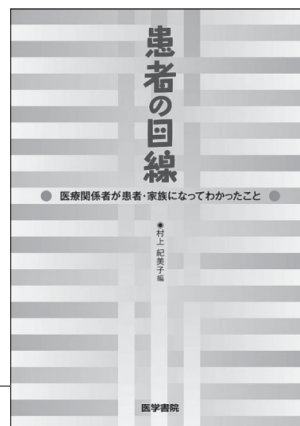
大分県立看護科学大学理事長・学長

患者の目線

医療関係者が患者・家族になってわかったこと

村上紀美子(編)

本体 1800 円 + 税 / 医学書院 (Tel : 03-3817-5657)



“目から鱗”^{うるこ}がたくさん詰まった本である。執筆
者 20 人は、かなり名前の通った医療関係者、もし
くは看護・介護・福祉に関わる研究者や編集者・行
政職である。その人たちが、実名で、「自分・家族
の医療体験」を書いているのだから、とても説得力
がある。面白く、思わず「なっとく」してしまうエ
ピソードや教訓があふれている。

個々の体験談の後には、毎回、編者の村上紀美子
氏による「この経験から学ぶ」が付いている。温か
く、かつ、的確にポイントが解説されており、学ぶ
べきことが多い。

第 1 章「患者の目線 医療者の目線」は、日常的
によく遭遇する盲腸、子宮筋腫などの手術と術後の
フォローが扱われている。これらの疾患は「医療者
の目線」からは診断・治療法が確立しており、危険
は少ないと思われやすいが、「患者の目線」からは
“自分と家族の重大事件”である。両者の視点の違い
とともに、患者・家族が乗り越えていくためには、
医療者側の配慮がとても重要だとわかる。

第 2 章「がんとともに歩む」では、日本人の約半
数がかかるがんが取り上げられている。健診で要精
検となり、確定診断が出るまでの不安な日々、治療
に立ち向かう力を取り戻す過程、がんサバイバーと
して、また、最期の日を予期しながら過ごす日々が
綴られており、各々の過程における「支え」の重要
性が示されている。イギリスのマギーズがんケアリ
ングセンターの機能や役割も紹介されており、日本
でも必要だと認識させられる。

第 3 章「迷いのなかで選ぶ看取り」は、人生を締
めくくる日々についての経験が語られる。胃ろうや

人工呼吸器の選択、家族へのグリーフケア、また、
病院での穏やかな看取りケアも描かれている。「最
期の時を本人と家族に返す」「患者の話したひと
をメモにして家族に伝える」など、医療者として必
要な、貴重な行動規範が示されている。

第 4 章は「患者と家族の物語」である。14 回も
の手術体験、激しい痛みの中での病院探しなどが語
られている。病気以前とは違う暮らしへの対応策、
医療者と患者との相性やコミュニケーションの問題
にも気づかされる。

第 5 章「なっとくのケア」では、入院、妊娠出
産、骨折治療のギプスなど現実的な事情や制約の中
で、医療関係者と患者・家族の双方が「なっとくで
きるケア」を探すプロセスが丁寧に描かれている。
「私たちの仕事は高齢者の望みをかなえること」と
して、気働きすることの重要性が指摘されている。

このように、いずれの文章にも平易な言葉の中に
重要な事項が指摘されていて、読んでいてとてもた
めになる、楽しい本である。

本書は、今まで患者と対置している存在と考えら
れることの多かった「医療関係者」が、患者・家族
になることによって 2 つの目線をもつことができ、
そこで得られた知見から「なっとくのケア」を探索
する手立てを得ることのできる大変素晴らしい本で
ある。自分のこと、家族のことを正直にわかりやす
く書いてくださった執筆者たちに感謝したい。

職場でのカンファレンスや勉強会の素材として、
また、これから保健・医療・福祉分野で働くことを
希望する学生の教材として、ぜひ活用されることを
お勧めする。